

# インド共和国西デカン地方における 小規模仏教石窟群の踏査 (1)

米田文孝・豊山亜希・森下真企・松並真帆

## 1. はじめに

本稿は関西大学文学部の研究グループが科学研究費補助金の助成を得て、インド共和国内に所在する仏教石窟寺院を対象として継続的に実施している調査研究（「インド石窟寺院の美術史的研究—西インド地域を中心として—」<sup>1)</sup>、「西インド石窟寺院の総合的研究—仏教石窟変遷過程の構造的理解に向けて—」<sup>2)</sup>）の成果報告の一部である。

現在、インド共和国内に確認される1200窟余の石窟寺院のうち、約90%がマハーラーシュトラ州、すなわちインド半島部の西縁部に位置する西デカン地方に集中している。石窟寺院の宗教的な帰属についてみると、主として仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教に分類されるが、現存例のうち約75%が仏教石窟である<sup>3)</sup>。ただし、現在では大部分の石窟において仏教的な性格が放棄された遺跡としてその姿をとどめているか、あるいはヒンドゥー教の祠堂などに転用されているため、元来は仏教に帰属していたとするほうがより正確な表現であるかもしれない。

数的な観点からみた仏教石窟寺院の圧倒的な優位性は、インドにおける石窟寺院という文化の展開において、仏教が果たした役割の大きさを示しているだけでなく、遺例の少ない同時代のインド仏教美術、さらには仏教を基層文化とする汎アジア圏との関係を理解する上でも、多くの示唆を与えている。先行する調査研究成果の多くも、こうした視点からインド石窟寺院の造営意義を論じてきたが、その研究対象がアジャンター石窟群やエローラー石窟群など、特定の著名な開鑿例に偏重してきた感は否めない<sup>4)</sup>。特に、石窟研究を主導してきた美術史分野においては、遺例の大部分を占める装飾的要素をもたない簡素な開鑿例を看過してきた経緯があり、また日本国内の研究者においては、とりわけ日本仏教美術の源泉—例えば、法隆寺金堂壁画のイメージソースとしてのアジャンター石窟壁画—として、インドの仏教石窟寺院が論じられてきた傾向が強い<sup>5)</sup>。

また、この学問的関心の偏重は研究対象の分布地域とも密接に関連している。すなわち、マハーラーシュトラ州北半部に分布する開鑿例は、アジャンター石窟群をはじめ、一般的に大規模かつ豊富な装飾的要素で荘厳されていることから、先学によって精力的に調査研究が進められてきた。一方、同州の南半部に分布する石窟群の多くは開鑿規模が小さく簡素性を特徴としていることに加え、地理的にアクセスすることが困難であり、現在まで単発的な研究成果が散見されるのみである<sup>6)</sup>。

これらの現状認識を出発点に、本研究グループの策定した研究課題は、先行研究における調査研究対象の偏向とそれに関わる諸問題、すなわち仏教石窟造営の消長過程に対する総合的理解の欠如を視野に、遺例を悉皆的に踏査して基礎資料を整備し、仏教石窟寺院の全体像を描出するこ

とを主旨としている。換言すると、先行研究によって蓄積された石窟寺院に対する既存の評価をいったん払拭し、全ての石窟群を同一の視線で再評価することを通じて、仏教石窟寺院の歴史的展開の実相を復元する試みである。

実際、仏教石窟寺院や周辺の考古遺跡、あるいは古代港に論点を特化した歴史地理学の分野が、美術史や考古学など石窟研究を牽引してきた分野の看過点を抽出している場合も少なくない<sup>7)</sup>。さらに、『エリュトラ海案内記』やプトレマイオスの『地理学』において言及される港湾都市とマハーラーシュトラ州南半部のアラビア海沿岸地域の同定、あるいはコールハーブルなど内陸の集落における外来要素の多い遺物の検出といった事実<sup>8)</sup>などは、その媒介として両者の中間地点に開鑿された仏教石窟寺院の意義を理解する必要性を強く喚起する。本稿では、マハーラーシュトラ州南半部に造営された仏教石窟寺院中、特にマハード石窟群とコール石窟群に焦点を絞り、その立地条件や構造的特徴、寄進銘の内容などを概観することを通じて、その造営意義について仮説的展望を試みる。

## 2. 仏教石窟寺院の発生と展開

インド最古の石窟寺院は、アショーカ王支配期におけるマウリア朝の本拠地であるマガダ国（現在のインド東部ビハール州）のバラール・ナーガールジュニ丘陵の岩塊に穿たれた一群で、紀元前3世紀の造営と推定される<sup>9)</sup>。この石窟群は遺存する寄進銘から、仏教とともに六師外道のひとつに数えられるアーjeeヴィカ教に献じられたことが知られる<sup>10)</sup>。仏教に帰属する最古の造営例として、同じくビハール州ラージギルや、アーンドラ・プラデーシュ州グントゥパッリ〔図版1〕などに開かれた一群が報告されている<sup>11)</sup>。また、仏教と同時期に創始されたジャイナ教に帰属する事例に、オリッサ州ウダヤギリ・カンダギリの開鑿例〔図版2〕が知られる。

いずれの地域も、アショーカ王の治世にマウリア朝の影響がみられる地域であることは、その周辺地域にアショーカ法勅が遺されていることから推定できる<sup>12)</sup>。その結果、石窟寺院造営という文化の伝播は、マウリア朝によるインド各地への進出をその契機の一つとすることが想定できる。岩山に信仰空間を掘りだす行為の思想的背景として、山を聖なるものと捉えてそこに信仰空間をつくることによって恒久的な聖性の獲得を志向したとする説<sup>13)</sup>がある一方、アショーカ王遠征の動機をインド各地に眠る鉱物資源の獲得に求め、その発見のために山が開鑿されたと説く意見<sup>14)</sup>もある。いずれが適切というよりも、双方の観念が融合した結果として、石窟寺院がこれほどまでの現存例を残すまでに発展を遂げたのが実態であろう。

さて、西デカン地方とほぼ同義であるマハーラーシュトラ州は、冒頭で述べたようにインド共和国内に現存する石窟寺院が集中的に分布する地域である〔第1図〕。その主要因は、第一に自然環境に求められる。マハーラーシュトラ州は、州内を縦断するサヒアードリー山脈（西ガーツ山脈）によって、東側の内陸地方（デーシュ地方）と西側のアラビア海沿岸地方（コーンカン地方）に区分され、州面積の約90%を前者が占めている。両地方は古くから、サヒアードリー山脈中の自然地形を巧みに利用したガートと呼ばれる峠道によって結ばれ、なかでも初期歴史時代の主要港であったカリエッナ（現カリアーン）と結ばれたナーネーガートは、最も繁栄を享受した行路のひとつであった。その重要性は、時の権力者であったサータヴァーハナ朝の支配一族が、

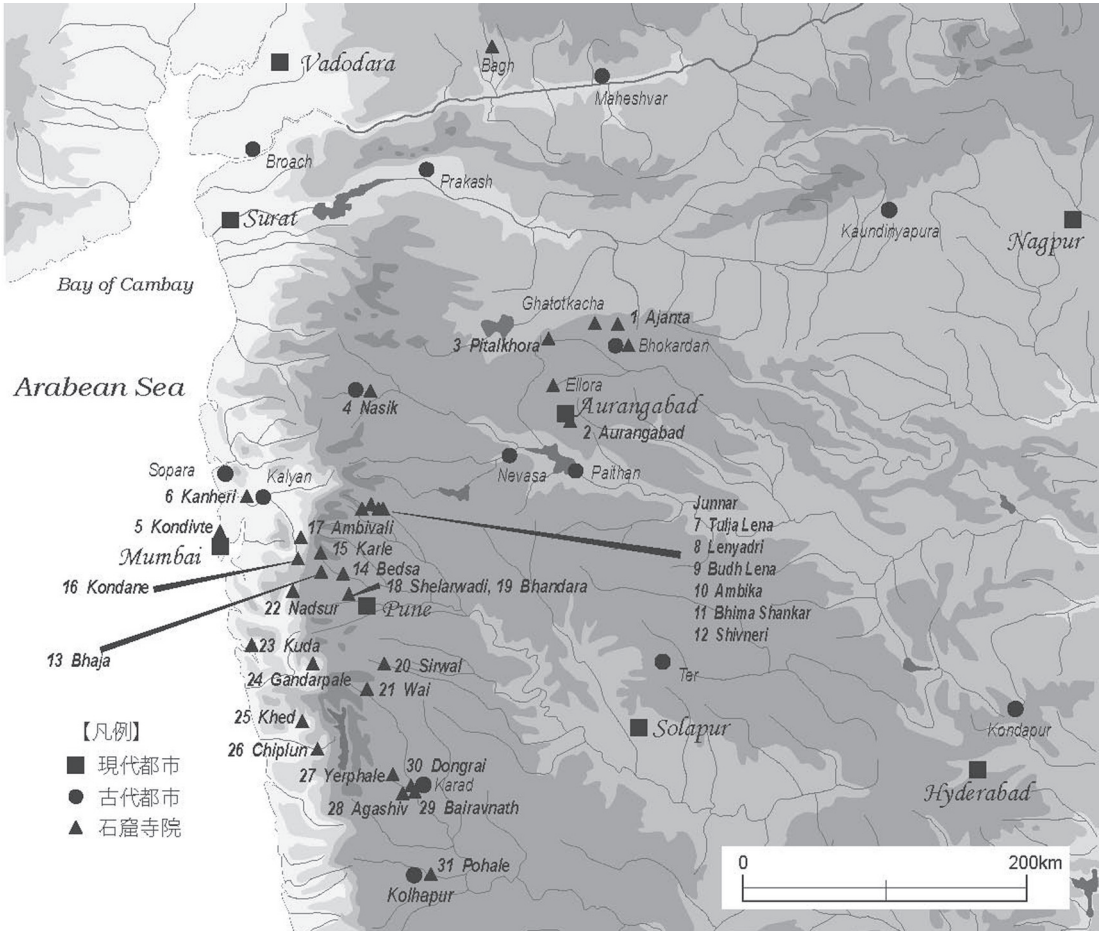


図版1 ギントウパッリ石窟群 チャイティア窟 全景



図版2 ウダヤギリ石窟群 ラーニー・グンパー窟 全景





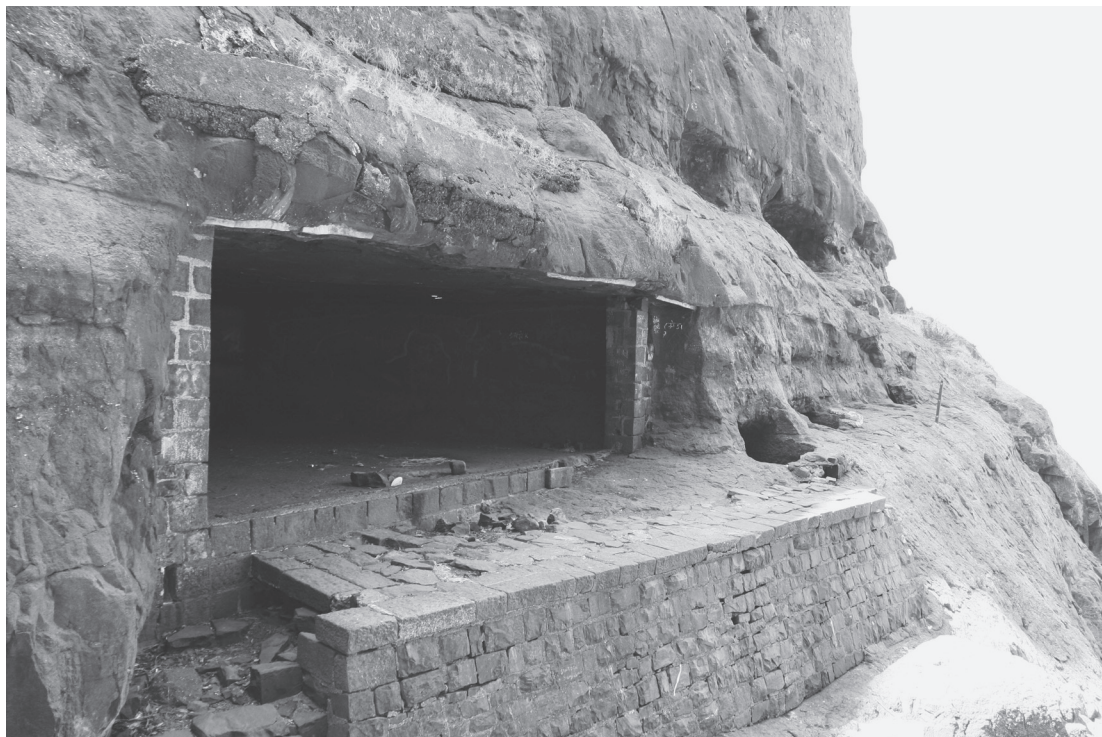
第1図 マハラーシュトラ州における主要仏教石窟寺院分布図

この地に記念碑的な石窟を造営させたことから推測できる〔図版3〕<sup>15)</sup>。

西デカン地方における石窟寺院の歴史は紀元前2世紀末頃に遡り、紀元後3世紀前半頃までさかんに開鑿されたとする見解が一般的である<sup>16)</sup>。この期間に開鑿された石窟寺院は、いずれも仏教に帰属するという特徴がある。その後、いったん造営活動は低調となるが、紀元後5世紀頃にグプタ朝の封臣であったヴァーカータカ朝の庇護下で造営活動が再興し、紀元後8世紀頃まで造営活動が継続された<sup>17)</sup>。この後期石窟寺院の宗教的な帰属性は多様化し、初期の造営例の多くは大乗仏教のものであるが、時代が下ると密教諸派がこれに代わり、さらにヒンドゥー教やジャイナ教の石窟寺院の開鑿が盛行した。エローラー石窟群やアウランガーバード石窟群では、このような複数の宗教に帰属する石窟が併存している状況を確認できる。

なお、西デカン地方における最古の仏教石窟寺院をいずれの造営例に同定するのかという基本的な問題について現在まで議論が続いているが、見解の一致には至っていない。これまでの一般的な見解は、ムンバイ郊外のコーンディヴテール石窟群〔図版4〕を最古であると措定することで一致してきた<sup>18)</sup>。この見解では、チャイティア窟である第9窟における矩形の前室と円形の祠





図版3 ナーネーガート石窟群 サータヴァーハナ王朝銘文のある石窟 全景



図版4 コーンディヴター石窟群 第9窟 内部

堂を併せた構造が、前述したインド最古例であるバラバル・ナーガールジュニの一群やグントゥパッリの円形祠堂、さらにはジュンナル石窟群の一支群であるトゥルジャー・レーナー石窟群第3窟と類似していると指摘される<sup>19)</sup>。近年では、ナーゴーターネー郊外に所在するターナーレー石窟群のチャイティア窟に看取できる古拙性とコーンディヴターとの類似性からその初期的年代観を補強する試み<sup>20)</sup>や、コーンディヴター第9窟の円形祠堂の格子窓枠に刻出された寄進銘の解説から、その年代を紀元後2世紀に下げようとする議論<sup>21)</sup>などが提出されている。

ここで、現地で計測した衛星位置確認システムの測定値を基準とした視点から、上記の問題を勘案してみると、デーシュ地方の仏教石窟寺院は海拔800m前後の地点に集中するのに対し、コーンカン地方の石窟群は海拔200m未満の地点に開鑿されている例が多数を占める。また、デカン・トラップを形成する玄武岩質の岩層をみると、デーシュ・コーンカン地方のいずれも石窟寺院の開鑿が集中する地点には、均質で厚い安定した岩層が平行に連なっている状況を観察できる。

さらに、各石窟寺院に造営されたチャイティア窟の形式に注目すると、類似した形式の分布には一定の傾向が看取でき、一般的にチャイティア窟の典型とされる馬蹄型プランでヴォールト天井をもつ開鑿例は、マハーラーシュトラ州の北半部、主としてデーシュ地方に多く分布する。これに対し、矩形プランで平天井をもつ開鑿例は、コーンカン地方を中心として同州南半部に分布地域が限定されるという特徴がある。また、先行研究において主な研究対象とされてきた馬蹄型・ヴォールト天井の造営例には、紀元前1～紀元後2世紀を中心として西デカン地方の覇権を掌握したサータヴァーハナ朝と、その拮抗勢力である西クシャトラパ朝による寄進銘が、10例余確認できる<sup>22)</sup>。王朝銘という観点から言及されることが多いナーネーガート石窟群を含め、両勢力の寄進を示す事例は、マハーラーシュトラ州北半部に限定されているが、マハーラーシュトラ州南半部の仏教石窟寺院を寄進した政治勢力は、その称号から明らかに統一支配王朝ではなく地方勢力であった<sup>23)</sup>。

以上の諸点を整理すると、馬蹄型プラン・ヴォールト天井をもつチャイティア窟は、サータヴァーハナ朝と西クシャトラパ朝という強大な政治権力と関連しながら、マハーラーシュトラ州の北半部を中心に開鑿され、その後、両王朝の衰退と歩調を合わせた地方勢力の勃興により、小規模な矩形プラン・平天井をもつチャイティア窟がコーンカン地方の南半部を中心に開鑿されるように遷移したと推定できる。前者に関しては、アジャンター石窟群やバージャー石窟群、カールレー石窟群をはじめ、先行研究において頻繁に調査の対象となっており、王朝銘をもつことから相対的な編年観も与えられている<sup>24)</sup>。しかし、後者に関してはきわめて限定された先行研究を除外し、これまで本格的に論じられたことはない。

一般的に、デーシュ地方の仏教石窟群がしばしば内陸の都市・集落と陸路のネットワークで結ばれていると想定できることに対して、コーンカン地方の仏教石窟群はアラビア海沿岸の港湾から河川を利用した直接的な水運によって結ばれていることが多い。アラビア海沿岸に位置した古代港は『エリュトラ海案内記』に詳しく、バリュガザ（現ブローチ）やカリエツナ（現カリアーン）、セミュツラ（現チャウル）、マンダゴーラ（現バーンコート）、パラエバトマエ（現ダーボール）といった名称が挙げられている<sup>25)</sup>。いずれの港湾都市もサヒアードリー山脈のガートや内陸の諸都市と結ばれているが、特にコーンカン地方の河川に沿ってサヒアードリー山脈へ至る経路に開鑿された小規模な仏教石窟寺院は、デーシュ側の石窟寺院のように集落と一定の距離を

保って教団を組織する大規模なものではなく、集落に近接した小規模なものが多数を占める。

このような西デカン地方北半部の港湾と内陸都市、政治権力との関係性については、すでに先行研究において活発に議論されてきた。例えば、バリユガザやカリエツナは、仏教文学において頻出する<sup>26)</sup>。また、『エリユトラ海案内記』では、前者が西クシャトラパ朝、後者がサータヴァーハナ朝の庇護を受けた港湾で、商業的覇権をめぐる攻防があったことが示唆されている<sup>27)</sup>。さらに、仏教石窟寺院に刻出された寄進銘には、バリユガザやカリエツナ出身の商人によるものが少なからず遺存しており、交易路沿いの仏教石窟寺院をこのような港湾都市出身の商人が利用していたことを示唆している<sup>28)</sup>。

一方、マハーラーシュトラ州南半部の仏教石窟寺院では、港湾都市の寄進者に由来する直接的な寄進が記録された事例はなく、また寄進銘それ自体も少ない実情がある。そのため、当該地域における初期歴史時代の社会経済と思想的展開の様相の把握はきわめて抽象的なものにとどまっている現状にある。次章では、『エリユトラ海案内記』に言及された、南コーンカン地方の港湾と河川の水運を利用して内陸へ至る交易路沿いに開鑿された仏教石窟寺院を祖上に、先行研究には希薄な構造や形式に関する整理・分析を通じて、その造営意義と社会的役割について素描してみよう。

### 3. コーンカン地方の仏教石窟寺院

マハーラーシュトラ州ライガル県に所在するマハードは、同州の州都ムンバイから直線距離で南南東約110kmに位置する。現在、町はムンバイとゴアを結ぶ基幹国道沿いに位置するため、アクセスは至便である。コーンカン地方における主要河川の一つであるサヴィトリー川（バーンコート川）は、河口部から約40km上流に位置するここマハードで、北側から流下するガンダーリー川と合流する。マハードは、アラビア海と近接していると同時に主要河川の合流地点であることから、交通の要衝として好適な立地環境にある。このマハードに開鑿された仏教石窟寺院群の踏査成果を出発点に、初期歴史時代にコーンカン地方が果たした役割を検討する。

マハードにおける人類最古の痕跡は旧石器時代に遡り、石斧や削器などが検出されている<sup>29)</sup>が、初期歴史時代に飛躍的發展を遂げた海洋交易と内陸交易路の整備は、マハードの地理的条件に優位性を与えることにつながった。すなわち、マハードは『エリユトラ海案内記』にマンガゴラとして言及される港湾都市（現バーンコート）とサヴィトリー川によって結ばれ、サヒアードリー山脈に形成されたガートに至るアラビア海沿岸側で最後の集落となったことから、交通の要衝として発展していった。マハードから東へ約20km進むと、サヒアードリー山脈南半部の主要路のひとつであったヴァランダー・ガートを通り、デーシュ川の集落ボールを経てシルワルに至る。ニーラー川流域に位置するシルワルは、カラードやコールハーブルなどデーシュ側の主要都市と結ばれた交通の要衝で、町から3kmの丘陵には、仏教石窟寺院が開鑿されている。シルワルからさらに内陸に進むと、サータヴァーハナ朝の主要都市の一つであるテールに至る<sup>30)</sup>。

また、マハードは南方約15kmの地点にあるポーラードプルとも結ばれ、ここからサヒアードリー山脈の最重要地点であるマハーバレーシュヴァルから内陸側に入り、ワーイーを経てカラード、コールハーブルへと至る<sup>31)</sup>。マハードと結ばれた交通上の要衝としてここに言及した地域の多く



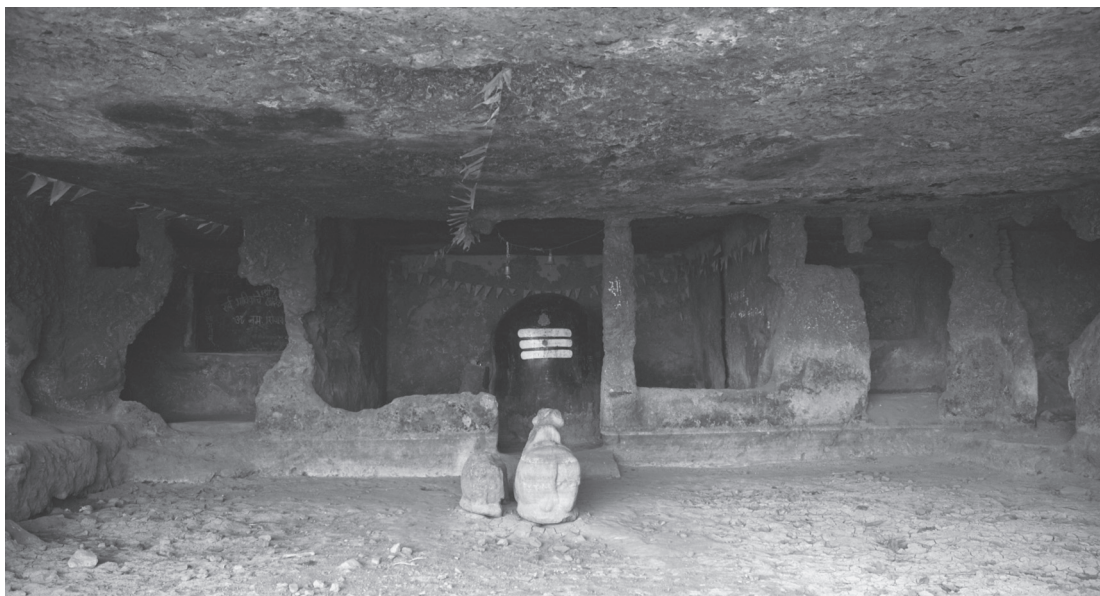
には、その近くに仏教石窟寺院の遺存が確認されており、これらにはシルワル石窟群〔図版5〕、ワーイー石窟群〔図版6〕、カラード石窟群〔図版7〕などが挙げられる。

さて、マハードの近郊には2群の仏教石窟寺院が確認できる。ひとつは、マハードの町から北西約1.2kmに位置する総数29窟の一群で、もう一つはマハードの町から南東約3kmに位置する総数8窟の一群である。前者はマハードの町に近いことや開鑿規模が大きいことから、先行研究においてマハード石窟群の名で知られてきた。しかし、インド政府考古局は近年、遺跡に最も近接する集落の名称を遺跡名として命名するという方針に基づき改名を進めている。この石窟群もまた、町の北部を流れるガンダーリー川流域に所在するパーレー村の背後に位置する山塊に開鑿されていることから、ガンダーリー川流域のパーレー村にある石窟群の意であるガンダールパーレー石窟群に改名された。一方、後者の石窟群はサヴィトリー川流域のコール村の後背部に開鑿されていることから、コール石窟群の名で知られる。実際にはコール村の南東側と北東側2地点に開鑿されているため、便宜的に前者はコール石窟群南支群、後者は同北支群と呼称される。

なお、19世紀後半にインド石窟寺院研究の礎を築いたファーガソンとバージェスは、マハードの北東にある丘陵にも小規模な房室と貯水槽が数基、さらにマハードからナーゴーターネーに向かって北上するルート、これは現在のムンバイー・ゴア間を結ぶ高速道路に一致する経路と推定できるが、このルート沿いの丘陵にも房室が1基確認されると記述している。しかし、その後の研究においては全く言及されておらず、今次の踏査において当該地域で実施した聞き取り調査でも確認できないため、その詳細は不明である<sup>32)</sup>。



図版5 シルワル石窟群 第2窟 全景



図版6 ワーイー石窟群 第3窟 内部



図版7 カラード石窟群 ジャキンワーディー支群 第6窟 全景



## A. マハード石窟群

マハード石窟群は北緯18°05'、東経73°25'に位置し、総数29窟を数える〔図版8〕。先行研究では総数28窟と記述されているが、ここでは踏査成果やインド政府考古局による石窟管理番号との照合などに依拠して、総数29窟と指定する。

**第1窟** マハード窟群中、最大規模を示す開鑿例である〔図版9〕。ただし、正面に設けられた柱廊式ヴェランダの形式などに着眼して、後期窟である可能性も推定されている。石窟全体の床面は基壇によって高められており、6基の柱と左右各1基の付柱によって軒を支持する構造のヴェランダをもつ。これらの柱のうち右側の4基は四角柱の上に左右に張り出した柱頭を載せるが、これは仏教石窟寺院にとどまらず5世紀以降の開鑿例において通有な柱頭形式である。また、向かって左端の柱は底部と柱頭を四角に彫りだし、軸の中央部を十六面に加工するが、この形式も後期窟に多く見られる形式である。このヴェランダ奥壁の中央部と左右両端部に内部への入口を開き、その間には方形の窓を設けている。

内部は矩形の広間で、3面の壁に低い腰壁が圍繞する〔図版10〕。左側壁に4基、奥壁に5基の房室が開かれているが、右側壁には全く開かれていない。奥壁中央に位置する3つは、中央の房室への入口となっている。当該窟が後期窟と推定されるもう一つの理由は、奥壁中央に開かれた房室内部に仏像浮彫を安置する点にある〔図版11〕。祠堂中央に掘り残された方形の岩塊正面には、浮彫で両側に扨子を携える脇侍によって添われる仏坐像、台座には法輪と鹿を表すが、上方には飛天もみえる。岩塊の左側面には金剛手菩薩、右側面には蓮華手菩薩を表現し、背面にも未完の仏坐像浮彫が遺る。

ダヴァリーカルは、この仏殿がカールレー、ナーシク、クダー石窟群など主要な前期仏教石窟



図版8 マハード石窟群 遠景





図版9 マハード石窟群 第1窟 全景



図版10 マハード石窟群 第1窟 内部



図版11 マハード石窟群 第1窟 奥壁中央の仏像

群に仏像が付加された紀元後6世紀と同時期のものと比定する見解は支持しつつ、石窟自体の開鑿年代はマハードの他の窟と同じく、紀元後3世紀頃に遡及すると推定するが、その根拠の一つとして広間の壁面下位に巡らされたベンチが前期に造営されたヴィハラのみに確認される要素であることを挙げている<sup>33)</sup>。ただし、正面から開鑿することが一般的な石窟にあって、氏の推定されるようにこの石窟の造営が前期造営期に遡ると仮定した場合、内部の広間やストゥーパ祠堂をほぼ完成させておきながら、正面のヴェランダ部分を未加工で残しておき、後期造営期になって同時代に特徴的な柱の形式で彫りだした可能性は低いであろう。

また、マハードが大乗仏教教団の拠点であったことは第1窟の仏殿のみならず、カーンヘーリー石窟群やパーンハーレー・カージ石窟群と同じく、ソケット式のストゥーパが遺跡全体に遺棄され散在していることから補強される〔図版12〕。これらを視野にして上記を再吟味すると、前期に造営が開始されたものの後期になって一段と繁栄したアジャンター石窟群やアウランガーバード石窟群のように、仏殿をもつ僧院窟という新様式の大規模な導入・展開という現象と歩調を合わせた文脈でマハード第1窟の造営事情を理解するよりも、既存の造営例を模倣しつつそこに大乗仏教としての信仰対象を付加したとするほうが適切であろう。結果的に、マハード第1窟は紀元後6世紀以降、後期仏教石窟の造営概念に基づいて新規に開鑿されたヴィハラ窟であるが、その基本的構造は既存の前期石窟を模範とした蓋然性が高い。





図版12 マハード石窟群 丘陵麓に遺棄されたソケット式ストゥーパ



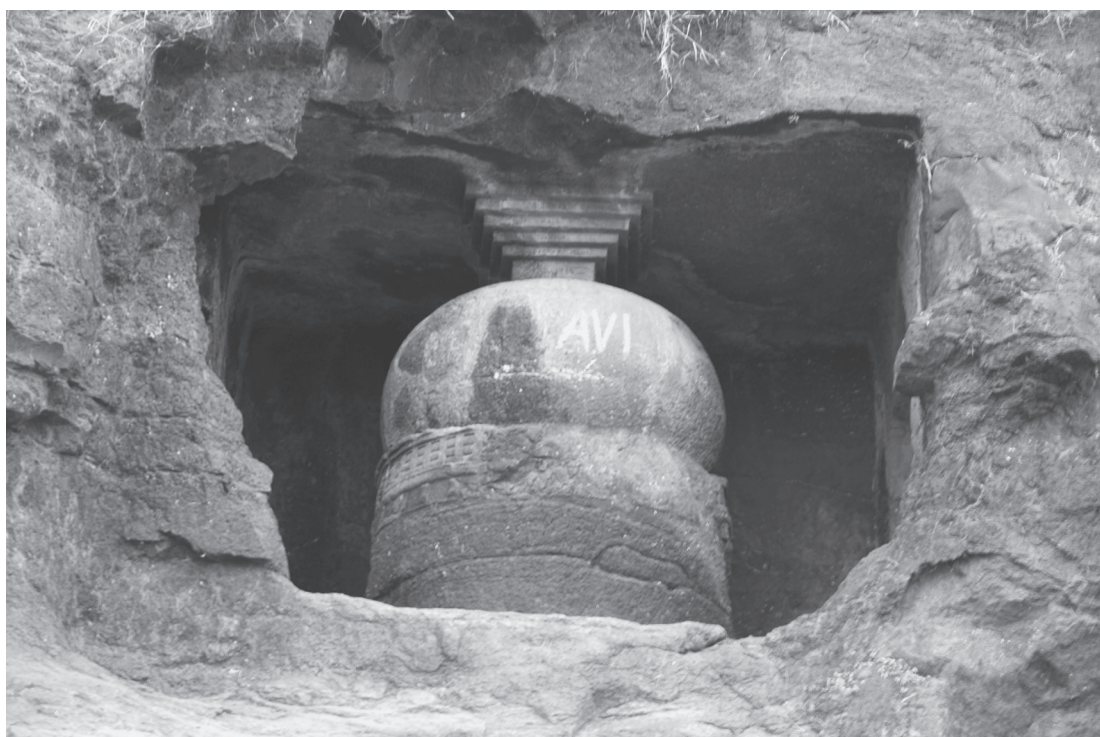
図版13 マハード石窟群 第9窟 全景

第9窟 マハード石窟群では、チャイティア窟として第9窟〔図版13〕・第15窟〔図版14〕・第21窟〔図版15〕の3窟が確認できる。ただし、第15窟は独立した石窟というよりも、岩塊面に龕を設けてストゥーパ浮彫を彫りだしたと表現するほうが実態に即している。また、第21窟は独立した房室内にストゥーパを安置しており、この点で第15窟と比較してチャイティア窟としての体裁を整えているものの、窟群全体の開鑿例中でみた場合にその規模は相対的に小さく、教団の中核施設というよりも教団内の奉獻あるいは記念碑的な性格で造営されたと想定する。





図版14 マハード石窟群 第15窟 全景



図版15 マハード石窟群 第21窟 全景



図版16 マハード石窟群 第9窟 奥壁中央の祠堂

その結果、第9窟はマハード石窟群中で唯一の本格的なチャイティア窟と判断できるが、先行する時代のチャイティア窟とは根本的な概念が異なる。すなわち、これに先立つ時代においてチャイティア窟とは、ストゥーパのみを安置する聖域空間であったのに対し、時代が下るとストゥーパを安置する空間内に僧房を配するように変容するが、マハード第9窟はまさにこのチャイティアとヴィハーラとが一体化した石窟の様相を具現している造営例である。この石窟が祠堂と僧房から構成される複合施設であることは、軒下の壁柱近くに刻出された寄進銘に、「チャイティア窟と8基の房室、2基の貯水槽、窟院へ至る通路が施与された<sup>34)</sup>」と記されていることから明らかである。

第9窟は、正面に2基の角柱と左右の付柱を設け、内壁の3面にベンチを巡らす矩形の広間と、それら3面の壁に開かれた僧房およびストゥーパを安置する祠堂からなる。房室は左右側壁面と奥壁面に各々3基ずつ開かれ、奥壁中央の1基が上記の銘文中に「チャイティア」として言及されるものである〔図版16〕。祠堂内に遺存する痕跡から、本来その内部には天井・床面と一体化したストゥーパが彫りだされていたと推断できるが、現在ではストゥーパ本体は消失し、天井部に傘蓋の一部が残るのみである。類似した形式を示す造営例は、サヒアードリー山脈を挟んでマハードと結ばれたワーイー石窟群や、プネー郊外のシェーラルワーディー石窟群〔図版17〕などに確認でき、いずれも紀元後2世紀後半を遡ることはないと思われる<sup>35)</sup>。





図版17 シェーラルールワーディー石窟群 第8窟 全景

## B. コール石窟群

先行研究においてマハード石窟群がほぼ例外なく言及されてきたのに対し、コール石窟群はファーガソンとバージェスによる初期の調査以降、長らく看過されてきた。近年では、ナーガラージュがその大著で言及しているが、平面図や図版が掲載されておらず、十分な検討とは言い難い<sup>36)</sup>。また、マハーラーシュトラ州南半部の小規模石窟群を最大限に網羅した研究成果であるグヴァリーカルの報告においても、コール石窟群に関しては言及がない<sup>37)</sup>。そのため、マハード石窟群がインド政府考古局によって史跡化され整備が進みつつある状況とは対照的に、コール石窟群は過半部が地中に埋没しており、保存状態は劣悪化の一途を辿っている。しかし、コール石窟群には複数の寄進銘があり、その寄進者にはマハード石窟群と共通している事例も含まれることから、当該地域全体の歴史像を総合的に把握するためには、コール石窟群にも正当な評価を与えるべきであろう。

**第5窟** コール石窟群（北緯18°03'、東経73°25'）は総数8窟が確認できる。第1～5窟は南支群〔図版18〕、第6～8窟は北支群〔図版19〕に分類される。なお、コール石窟群はインド政府考古局による公式な石窟番号がないため、ここに記載した石窟番号は先行研究と照合して暫定的に付与したものである。

さて、仏教石窟寺院の形式論はチャイティア窟を基軸に展開されるため、チャイティア窟をもたないコール石窟群は考察の対象外になってきた。ただし、ジュンナル石窟群のシヴネーリー西支群やドゥダーリアー支群など、チャイティア窟を擁する仏教石窟寺院群に近接してチャイティア窟をもたない仏教石窟群が開鑿されている例が確認できることから、今後その意義について論議を深める必要がある。





図版18 コール石窟群南支群 全景



図版19 コール石窟群北支群 第6窟



図版20 コール石窟群南支群 第5窟 全景

現状でコール石窟群が研究者の関心を集めるのはその構造上の要因ではなく、寄進銘をもつためである。コール石窟群には3例の寄進銘があり、第3～5窟まで連続して刻出されている。そのうち、第5窟〔図版20〕の規模は石窟群中最大であるが、全体的に岩塊の崩落と土砂の堆積が著しい。矩形プランを呈する広間の左側壁は、窟開口部近くに房室を開いており、広間より床面・天井とも高く設定されている。その奥にも崩落した房室らしき痕跡があるが、現状では明確にすることができない。

#### 4. マハード石窟群とコール石窟群の寄進銘

マハード石窟群とコール石窟群には、各々3例の寄進銘が遺存する。以下に、原文のアルファベット表記と和訳を挙げ、その内容について考察する。ただし、マハード第4窟の寄進名については断片的にしか残存しておらず、意味を判読することが困難であるため除外した。

マハード第9窟：プラークリット語、5行、ヴェランダ軒下の付柱正面

(原文) sidhaṃ kumārasa Kāṇabhoasa Vheṇupālitasa

[e] sa leṇa cetieghara<sup>+</sup> ovarakā ca atha 8 vikamaṃ<sup>+</sup> niyu=

taṃ le [ṇa] sa ca ubhato pasesu poḍhiyo be 2 leṇasa

alugaṇake<sup>+</sup> patho ca dato etasa ca kumārasa deya=<sup>38)</sup>

(和訳) 成就あれ！かの王子 Kāṇabhoasa Vheṇupālitasa (Kāṇabhoja Viṣṇupālitasa) によって、窟院と制



多堂と8個の房室からなる建造物が贈与された。そして、窟院の両側に2個の水槽と、窟院に付設された小径が施与された。かの王子の寄進物である<sup>39)</sup>。

マハード第27窟：プラークリット語、6行、ヴェランダ右側外壁

(原文) sidham gahapatisa seṭhisa Saṃgharakhitasa putasa Vi…  
Vādasiriya deyadhamaṃ leṇaṃ cetiakoḍhi Pā…  
chetāni yāni leṇasa pethā gorāva…naṃ…  
ti chetehi kare tato cetiasa gadha…  
aṭha 8 bhatakaṃmāṇikā aṭha 8 koḍhipura…  
kāraṇakāraṇe ca leṇasa savenā ka…<sup>40)</sup>

(和訳) 成就あれ！(この)居住窟、制多壁龕、Pā…(村の)土地は、長者で組合の統領であるSaṃgharakhita (Saṃgharakṣita)の息子Vi…(の妻)Vādasiri (Vādaśri)の寄進物である。窟院の穀物の粉は、gorāva…の…ti(村の)土地で作られるべきであり、その(収益)より、制多の8個のgadha(香料の?)…、8人の炊事人、正面廊、…(の費用)が、それぞれの機会に、窟院のすべての…によって(充当されるべきである)<sup>41)</sup>。

コール第3窟：プラークリット語、1行、窓枠上部

(原文) Āghāakasā-gāmikiyasa Sivadatasa leṇa deyadhama [//\*]<sup>42)</sup>

(和訳) (この)窟院は、Āghāakasa (Āghātakarṣa)村の住民Sivadata (Śivadatta)の寄進物である<sup>43)</sup>。

コール第4窟：プラークリット語、2行、窓枠上部

(原文) …upāsakasa duhutuya Sivadatasa bitiyakaya  
leṇa deyadhama [//\*]<sup>44)</sup>

(和訳) (この)窟院は…優婆塞の娘で、Sivadata (Śivadatta)の伴侶であるDhamasiri (Dharmaśri)の寄進物である<sup>45)</sup>。

コール第5窟：プラークリット語、2行、ヴェランダ左側壁

(原文) gahapatiputasa seṭhisa  
Saṃgharakhitasa deyadhamaṃ leṇa [ṃ//\*]<sup>46)</sup>

(和訳) (この)窟院は、長者の息子で組合の統領Saṃgharakhita (Saṃgharakṣita)の寄進物である<sup>47)</sup>。

これらの寄進銘から、3点のことが理解できる。第一に、マハード第9窟の銘文によると、当該地域がカーナボージャの称号をもつ地方勢力の統治下におかれていた点である。ボージャはコ



ーンカン地方の地方勢力が用いた称号であることが知られ、マハーボージャの称号が北コーンカンで使用されたのに対して、南コーンカン地方のヴァリエーションとして、カーナボージャの称号が使用されたものとみられる。第二に、コール第3窟の寄進者シヴァダタと、同第4窟の寄進者ダマシリが夫婦である点が判明する。第三に、マハード第27窟の寄進者ヴァーダシリは、コール第5窟の寄進者サンガラキタの義理の娘である点で、石窟の開鑿と寄進名の刻出が同時期であるとした場合、マハード石窟群、少なくとも第27窟はコール石窟群より遅れて造営されたと判断できる。

また、マハード第27窟はその寄進形態にも特筆されるべき点を含んでいる。すなわち、マハード第27窟の寄進内容によると、村落が仏教教団に施与され、その土地から得られた収益によって教団運営が行われるということが記録されている。マハード第27窟のヴェランダ側壁に類して、ジュンナル石窟群シヴネーリー東支群の第33窟もストゥーパ浮彫〔図版21〕を表しており、その



図版21 ジュンナル石窟群 シヴネーリー東支群 第33窟  
ヴェランダ左側壁のストゥーパ浮彫

寄進銘の内容も仏教教団に金銭を預託して、そこから得られる利息によって教団自体が維持運営を行うということを記録している<sup>48)</sup>。

すなわち、一定の距離をおいた集落から布施を受けて維持された仏教教団の姿は過去のものとなり、マハード石窟群にせよシヴネーリー東支群にせよ、集落に近接した地点に僧院を開き、主体的な経済活動を展開するようになっていったことが窺われる。シヴネーリー東支群はジュンナル石窟群中、最も造営年代が下る一群であることがチャイティア窟の形式などから推測できるが、その開鑿年代は紀元後2世紀後半を遡ることはないことを参照した場合、マハード石窟群の造営年代もこれと時期を前後すると推測しても大きく齟齬を生じることはないであろう。また、コール石窟群はこれらをやや遡るが、マハード石窟群と親子関係にある人物の寄進があることから、その造営時期差は限られた年代幅に収まるであろう。

## 5. 結びにかえて

本稿では、マハーラーシュトラ州南西部に造営されたマハード石窟群とコール石窟群を対象にして、主要窟の構造的特徴の概観と寄進銘の検討を通じて、これらの仏教石窟群の造営について歴史的な背景を考察しつつ、その意義の解明を試みた。

結論を要約すると、両石窟群は『エリュトラ海案内記』で言及される港湾バーンコートとサヴィトリー川の水運によって結ばれており、このサヴィトリー川が支流ガンダーリー川と合流する地点にマハードが位置することから、水運を利用した交易の要衝となり、商業的利益の余剰を求めた仏教教団が石窟型僧院を開いたと理解される。先行して開鑿されたと推定できるのはコール石窟群で、河川の合流地点に位置する集落の中心からやや離れたサヴィトリー川流域に営まれた。これに遅れて開鑿されたマハード石窟群は、ガンダーリー川流域にあってマハードの集落全体を見渡すことができる位置に造営され、サータヴァーハナ朝以後の地方勢力の援助を受けていたらしい。コール石窟群と比較してマハード石窟群の方が在家社会との距離が近く、教団運営の方法もより主体的であることが、寄進銘の内容から判断できる。僧院の中核施設であるチャイティア窟の構造も、僧房の中にストゥーパ祠堂が納められた簡素な新しい形式が採用されるようになり、僧院の各所にストゥーパが頻繁に表現されるようになって先行時期のストゥーパとは明らかな相違を示しており、その意義が変容していることが看取できる。

今回は踏査成果を先行研究と照合して再検討することに主眼をおいたため、仏教教団の再編や宗教儀礼の変容などという観点については言及できなかった。今後はこのような思想的背景の論拠を併せた考察を行うことを通じて、先行研究の中心的な対象であったサータヴァーハナ期に後続する、コーンカン地方南部における仏教石窟寺院がいかなる歴史的な文脈において消長したのか、複眼的な視野から明確にしたい。

### 注

- 1) 平成15～17年度科学研究費補助金（基盤研究〔B〕海外学術調査、課題番号15401010）「インド石窟寺院の美術史的研究—西インド地域を中心として—」, 研究代表者・山岡泰造（関西大学文学部教授,

- 平成15年度), 中谷伸生 (関西大学文学部教授, 平成16・17年度)。
- 2) 平成18~20年度科学研究費補助金 (基盤研究 [B] 海外学術調査, 課題番号18401033) 「西インド石窟寺院の総合的研究—仏教石窟変遷過程の構造的な理解に向けて—」, 研究代表者・米田文孝 (関西大学文学部教授)。
  - 3) 宮治昭『インド美術史』吉川弘文館, 1981年, 52頁。
  - 4) 代表的な研究成果として, Walter M. Spink, *Ajanta to Ellora*, Bombay, Marg Publications, 1967. などが挙げられる。
  - 5) 日本国内のアジャンター石窟群研究の代表的成果として, 高田修・田枝幹宏『アジャンタ』平凡社, 1971年; 町田甲一・福田徳郎『アジャンター石窟寺院』朝日新聞社, 1987年, などが挙げられる。
  - 6) マハーラーシュトラ州南半部の小規模な仏教石窟群を研究対象とした主要な成果には, S. Nagaraju, *Buddhist Architecture of Western India*, Delhi, Agam Kala Prakashan, 1981; M. K. Dhavalikar, *Late Hinayana Caves of Western India*, Poona, Deccan College Post Graduate and Research Institute, 1984. などが挙げられる。また, 個別の石窟群を扱った成果も少数ながら提出されている。
  - 7) 例えば, 近年の成果にはコーンカン地方の港湾史を扱った Sharad Hebarkar, *Ancient Indian Ports*, New Delhi, Munshiram Manoharlal, 2001. などがある。
  - 8) H. D. Sankalia and M. G. Dikshit, *Excavations at Brahmapuri (Kolhapur) 1945-46*, Poona, Deccan College Post Graduate and Research Institute, 1952.
  - 9) 宮治, 前掲書, 22~23頁。
  - 10) M. Kittoe, "Notes on the Caves at Burabur," *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, XVI, 1847, pp. 401-16.
  - 11) A. H. Longhurst, "The Buddhist Monuments at Guntupalle, Kistna District," *Annual Report of the Archaeological Department, Southern Circle*, 1916-17, pp. 30-36.
  - 12) 例えば, オリッサ州ダウリの法勅はアショカが当地における凄惨な遠征を悔いて仏教に帰依した契機となった記録として知られる。Romila Thapar, *Asoka and the Decline of the Mauryas*, London, Oxford University Press, 1961, pp. 255-56.
  - 13) 平岡三保子「西インドの石窟寺院—仏教石窟寺院の発生と展開—」肥塚隆・宮治昭編『世界美術大全集第13巻インド (1)』小学館, 2000年, 258頁。
  - 14) Romila Thapar, *The Penguin History of Early India: from the Origins to AD1300*, London, Penguin Books, 2002, p. 196.
  - 15) James Burgess, "Report on the Elura Cave Temples and the Brahmanical and Jaina Caves in Western India," *Archaeological Survey of Western India*, V, London, Trübner, 1883, pp. 59-74.
  - 16) 平岡, 前掲論文。
  - 17) Susan L. Huntington, *The Art of Ancient India: Buddhist, Hindu, Jain*, New York and Tokyo, Weatherhill, 1985, pp. 239-274.
  - 18) Vidya Dehejia, *Early Buddhist Rock Temples*, London, Thames and Hudson, 1972, pp. 152-53; Huntington, *op.cit.*, pp. 74-77.
  - 19) Dehejia, *Ibid.*
  - 20) M. N. Deshpande, "Observation on the Chronology of Some Early Rock-cut Chaitya Caves of Western India," *The Andhra Pradesh Journal of Archaeology*, Satavahana Special, 1995, pp. 83-87.



- 21) Suresh V. Jadhav, "Tulja Leni and Kondivte *Caitya-grhas*: A Structural Analysis," *Ars Orientalis*, Supplement Volume I, 2000, pp. 23-32.
- 22) James Burgess, "Report on the Buddhist Cave Temples and Their Inscriptions," *Archaeological Survey of Western India*, IV, London, Trübner, 1883, pp. 99-114.
- 23) 例えば、クダー石窟群などが挙げられる。Burgess, *Ibid.*, pp. 84-88.
- 24) 主要造営例を網羅して相対年代を提示した代表的な研究成果には、Dehejia, *op. cit.*; Nagaraju, *op. cit.*; Huntington, *op. cit.*などが挙げられる。
- 25) Lionel Casson, *The Periplus Maris Erythraei*, Princeton, Princeton University Press, 1989, p. 297.
- 26) H. P. Ray, *Monastery and Guild: Commerce under the Satavahanas*, Delhi, Oxford University Press, 1986, p. 57.
- 27) Casson, *op. cit.*, p. 83.
- 28) 例えば、ジュンナル石窟群のアンビカー支群やレーニアードリー西支群において、寄進者の出身都市として、これらの地名が見出される。Burgess, "Report on the Buddhist Cave Temples," p.94, No. 11, p. 96, No. 19.
- 29) S. J. Guzder, *Quaternary Environment and Stone Age Cultures of the Konkan Coastal Maharashtra*, Poona, Deccan College Post Graduate and Research Institute, 1980, p. 39.
- 30) Hebalkar, *op. cit.*
- 31) *Ibid.*
- 32) James Fergusson and James Burgess, *The Cave Temples of India*, London, W. H. Allen, 1880, p. 211.
- 33) Dhavalikar, *op. cit.*, pp. 46-47.
- 34) Burgess, "Report on the Buddhist Cave Temples," p.88, No. 1.
- 35) Dhavalikar, *op. cit.*, pp. 44-46.
- 36) Nagaraju, *op. cit.*, pp. 231-32.
- 37) Dhavalikar, *op. cit.*
- 38) 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』第一巻, 平楽寺書店, 1996年, 483頁。
- 39) *Ibid.*
- 40) *Ibid.* 483~484頁。
- 41) *Ibid.*
- 42) *Ibid.* 469~70頁。
- 43) *Ibid.*
- 44) *Ibid.* 470頁。
- 45) *Ibid.*
- 46) *Ibid.*
- 47) *Ibid.*
- 48) Burgess, "Report on the Buddhist Cave Temples," p.93, No. 3.